

碧峯奨学生インタビュー | 張裕英さん<ペンシルベニア大学ウォートン校 MBA>

中小企業コンサルとして尽力 自営業の多い在日同胞の支えに

在日同胞の寄付と韓国政府の支援により 1963 年に設立された韓国教育財団は、在日同胞学生の学びを支えるため、長年にわたり奨学金事業を行ってきた。2003 年には、グローバルな舞台で活躍を志す若者を支援するため、「碧峯奨学基金」を創設。今回は、その支援を受けて米国で MBA を取得し、現在は中小零細企業コンサルタントとして活動する張裕英さんに話を聞いた。

Q：現在のお仕事について教えてください。

A：外資系金融機関での勤務を経て日本へ戻り、現在は中小零細企業コンサルタントとして独立しています。コストカットの方法や、国・自治体の助成金申請の支援など、中小零細企業向けのコンサルタント業務に日々邁進しています。

Q：中小零細企業への関心は、どのような経験から生まれたのですか。

A：在日韓国人 3 世として生まれ、喫茶店などの自営業を営む両親が苦勞する姿を、幼いころから身近で見て育ちました。両親が事業について相談できる相手もなく苦勞する姿を見ていたことから、「中小零細企業の役に立ちたい」と思うようになり、中学生の頃に公認会計士を志しました。

大学進学後は、資格専門学校とのダブルスクールで試験勉強に励みました。大学の講義に思うように出席できないこともありましたが、周囲の助けもあり単位を取得することができました。公認会計士試験にも在学中に合格し、卒業後は 4 大監査法人の一つであるあずさ監査法人に就職しました。

Q：公認会計士の仕事はいかがでしたか。

A：実は、働く中で次第に心の内で違和感が膨らんでいきました。公認会計士の業務は企業の決算書類作成が中心であり、それ以上の付加価値を見出しにくいことに疑問を感じるようになりました。そこで、MBA で新たな知識を身に付けたいと思ったのが正直なところです。

また、幼いころから海外で学びたいという願いもありました。日本での学生時代はダブルスクールで遊ぶ暇もなく、思い描いていたようなキャンパスライフを送ることができませんでした。「キラキラしたキャンパスライフを送りたかった」という心残りも、留学を後押しした理由の一つです。

Q：留学にあたり、資金面での不安はありましたか。

A：米国留学には 2000 万円もの資金が必要でした。奨学金を必死に探しましたが、日本国籍を条件とするものもあり、応募できる奨学金がなかなか見つかりませんでした。両親からの借入を検討していたとき、民団新聞で韓国教育財団の碧峯奨学金の存在を知り、応募しました。

Q：採用が決まったときのお気持ちはいかがでしたか。

A：藁をもつかむ思いで応募したので、採用が決まったときは、これで学費の心配をしないですむという安心感とうれしさと感謝の気持ちでいっぱいになりました。

Q：MBAではどのようなことを学びましたか。

A：金融、企業評価、M&A（企業の合併・買収）のほか、独自の専門分野として、スモールビジネスやファミリービジネスに関する研究を行いました。

Q：米国でのMBA留学はいかがでしたか。

A：念願だった米国留学でしたが、想像していた華やかなキャンパスライフとはかけ離れたものでした。英語には自信がありましたが、講義は半分も理解できず、世界中から優秀な学生たちを前に、自分は小さな世界で生きていたのだと思い知らされました。それでも、奨学生に選ばれた責任感と強い意志、そして同級生の支えにより、無事にMBAを取得することができました。

Q：韓国教育財団への思いをお聞かせください。

A：監査法人勤務時代は悶々とした思いを抱えていましたが、奨学生に選んでいただいたことで、高いスキルを身に付け、広い世界を知ることができました。学びを支えていただいたことに、深く感謝しています。今後は、私自身も次世代のために、何らかの形で貢献していきたいと考えています。

Q：碧峯奨学基金の意義について、どのように感じていますか。

A：MBAを取得した在日韓国人が社会で活躍することは、在日同胞の地位向上にもつながると感じています。碧峯奨学金は、そのような人材の挑戦を支える大きな意義を持つ制度だと思います。今後も長く続いてほしいです。

Q：今後の目標について教えてください。

A：最近、両親の介護を通じて介護業界への関心も高まっています。介護士は低待遇のため慢性的な人手不足になっています。そのため今後は、介護業界の地位向上にも貢献し、多くの人々が安心して老後を過ごせる世の中にしたいと考えています。これからも留学を通じて身に付けたスキルを生かし、社会課題の解決に役立てていきたいです。